

皆さん、こんにちは。今日はテキストの十頁の三行目、「獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」というところをお話しさせていただきますが、少し前の「摂取心光常照護」から今日のところまで、ご一緒に拝読させていただきたいと思います。遠慮なさらなくて声をお出しいただきたいと思いません。

摂取心光常照護 已能雖破無明闇
摂め取って捨てないみ仏の光は、
常に私たちを照らし護ってくださいます。
すでに無明の闇は破られているといっても、

貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天
私たちのむさぼり、執着し、怒り憎しむ雲や霧が、
常にみ仏の真實の心を覆（おお）ってしまいます。

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇
たとえば、日光が雲や霧に覆われても、
その下は、明るく闇がないように、
み仏の心は私たちの闇をつつんでいます。

獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣
真（まこと）の信を獲得（ぎやくとく）することができれば、
いのちの尊さに目覚めて敬うことができ、
大きなよろこびに満たされます。
そのときただちに、迷いの生き様が断ち截（き）られて
本願に生きるものとなるのです。

どうもありがとうございました。

本日もこうして皆様方と一緒にご参りすることができて、親鸞聖人がご製作になりました「正信偈」を学ばせていただくと、まことに有難いことで、感謝申し上げる次第であります。こうして皆様方のお元気なお姿を拝見できて、うれしく存じます。

今日、初めにいつものように主観を申したいと思うのでありますが。私としては大変びっくりするような俳句に出遇いました。その俳句を紹介させていただきます。

「百歳も 棚田の畦の 草刈りす」

棚田というのは傾斜地にあって、何段も何段も段になって田を作るという。ご覧になった方もお有りかと思います。私も初めて見た時はビックリしましたね。私の家にも田んぼや畑や山地もあって、山岳の傾斜地はあるのですが、いわゆる棚田程じゃない。棚田は傾斜から作って、水田なんかがいっぱいあって。それを見るとね、ああ人間の生活ってこんな厳しいところで生きて来られたのだなと。小さな田んぼが二畳あるかないかというね、そういう棚田。もっと広いのも勿論ありますけど。

これは沼津市のいわきさんという方の歌われた句です。本人の歌か、誰かがご覧になって歌われたのかそれはわかりませんが、これはビックリしましたね。だいたい親鸞聖人は九十歳まで生きられたのですけれども、今の時代の百歳まで生きるといえるのは並大抵ではございません。百歳まで生きて、なお傾斜地のきつい所の棚田の草刈りをされている。これは重労働ですよ。草刈りするというのは屈んでやりますからね。特に今頃から始まると暑いですね。とてもじゃないけど我慢しきれない。

何故こういう歌を紹介させていただいたかと申しますと、この私たちの世界にはご高齢まで生きられて、そして肉体労働に従事しておられる方がいらっしゃるということを聞く時ですね、聞いた人が驚くと同時に、励まされるということがあると思うのです。誰も彼も百歳まで生きられるわけではありません。九十歳もなかなか容易ではありません。しかしそういう百歳になっても棚田の畦の草刈りをしておられるということを教えられると、私は私にいただいた命を一生懸命に生きるということを教えられます。そこに私は大事な意味があると思うのです。

これは私が京都におりましたときに、高倉会館という聞法の道場がありまして。そこでお聞きした、新潟県の平沢興という、京都大学の総長もなさった方なのですけれども。その先生が、曾我先生が九十歳の時に、「曾我先生は、御歳は九十歳だけれども、肉体の歳は六十歳だ」というようにおっしゃいますね。私はそのことに納得するのです。

曾我先生に何度もお会いして、杖をついておられました。晩年ね。お助けしようとしたら「大丈夫です。歩けます」と言われたことがありました。非常に体格もがっしりしておられました。手の腕なんか私より太いのですね。だから文句なしに九十歳だけれども、肉体の歳は六十歳であります。

ちなみに曾我量深先生も新潟のご出身で、平沢興先生も新潟の出身で、同じ村であったかと思うのですが。よくぞよくぞね、そういう同じところから、本当に素晴らしい方が与えられたと思えますね。

それについて私は、土徳ということですね。その土地にはその土地の大事な伝統があって、そこから大事な方々が生まれて来られるという。新潟というと親鸞聖人が流罪に遭われた土地であり、ご苦労なされた土地であります。そこにはそういう歴史的な意味合いがあって、ご門徒の方々に親鸞聖人の教えは浸透しているということが思われるわけでありまして。そこに自ずと人が育ってくるということですね。

そのことを思っているときに、ふと気が付いたのですが、私自身がね、土徳の恩恵に預かっているのです。私は四国の香川県讃岐なのですが、お寺が八十八カ所あって、お寺参りが非常に盛んであって、そしてお遍路さんがよくいらっしゃいますからお遍路さんを大切にするという、そういう風習があるのです。

私は八十八カ所に初めてお参りした記憶は母が亡くなった年の四歳の時に、私たちの地域では七か所参りということがあって、お寺さんと七か所参ると。一日かけて参ると。それは四つの時からそういうことをしたということがあって。仏様を敬い尊ぶ。そして先立って行った方々のご苦労、恩徳を思うことということは非常に大事にするということがありました。

ああそうか、そういうふうな土徳。先立って行かれた方々の大きな恩恵を受けて、こうして仏法を聴聞させていただくのであるなということを実感としてね、領くことができるのであります。

親鸞聖人はご承知のように九十歳までご長命であられたわけですが、親鸞聖人の全生涯、全生涯を挙げてですね、やはり人間存在の問題に取り組まれて。本当に新しく、それまで気が付かなかった問題を掘り起こしてくださった方であると言えるかと思えます。

その恩恵を私たちが今、現に受けて生きておると。ことに『教行信証』は親鸞聖人その人である

ということが出来るかと思ひます。その中の「正信偈」をいただくということは、親鸞聖人その人に今、遇うと。今、教えを聞くというそういう意味があるかと思ひます。そのことを初めにですね、今日の感じたこととして申し上げました。

今日の所は「獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣」という二句一行について学ばせていただきたいと思ひます。これは漢文であります、読みとしては、

信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん、すなわち横に五悪趣を超截す。 (真宗聖典二〇五頁)

親鸞聖人は特に「獲信見敬大慶喜」という言葉については非常に心を込めておられまして、真蹟の『坂東本』というのが残っておるのであります、ご覧になった方もたくさんいらっしゃると思うのであります。国宝に指定されておられて。そこに親鸞聖人が非常にご苦勞をなさって書かれたということが頷けるということがあるのであります。

「見敬得大慶喜人」これは見て敬い得て大きに慶喜する人と書いて、これ(全部)を消されているのですね。そして、「獲信見敬大慶人」と書いてあるのです。『坂東本』はこうなっておるのですね。

この『真宗聖典』では「獲信見敬大慶喜」となっておるのですけれども、これは西本願寺の『高田本』によって「獲信見敬大慶喜」という言葉でいただいております。私が申し上げたいのは、「正信偈」を製作されるにあたって、非常に真剣に打ち込まれておると。ご自身が納得できなければ、消されてね。そのことがまず思われます。

そしてご自身が表わされました「正信偈」の言葉を、

愚禿積の親鸞が『正信偈』の文 (真宗聖典五三〇頁)

『尊号真像銘文』というお聖教には、やはり親鸞聖人はいわゆる常識的な意味で、私心がないのですね。私心がないのだけれども、ご自身の内心としては、愛欲名利ということが非常に深いものであると、そういう告白をしておられます。

だいたい、私心がないということは自分では言えません。やはり深く見れば、私心に満ちておると言わなければならない。私心を超えた心に触れて、私心がありますという反省が出てくるわけです。私心がありませんと言える人はそういう自分の心を善しとし、絶対化していると、そう言えるかと思ひます。親鸞聖人の言葉に対せば、虚仮不実のわが身にてと。

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし

(真宗聖典五〇八頁)

その言葉に触れてね、本当に真実だなど。もう説明を超えてね、響く、伝わる、頷くわけです。それは真実に出遇った人が初めて虚仮不実のわが身にてとということが懺悔され、表現される。

ちょっと飛躍しますが、「獲信見敬大慶人」と書かれたそれを「大慶喜」と最終的にはいただいておりますけれども。慶喜するということと人ということは、別ではないということなのですね。慶喜する、本当に喜ぶ人が生まれる。誕生するという。だから私たちがこうして「正信偈」に学ばしていただくということも、「正信偈」をいただいて信心をいただき、信心に目覚めて、生き

る人として誕生すると。そういう人が生まれるという事実ね。そのことをはっきりしておきたいというふうに思います。

やはりこうして明順寺様にお参りさせていただいて、聴聞するというのも、私たちの生活の事実として足を運んできておるのであります。それは一つ言えば、足を運ばしめてくださったのであります。足を運ぼうというそういう本人の意志が勿論なければなりませんけれども。その意志が叶うということは足を運ばせるそういう用きが実現しているという。そういう事実によっておることが教えられるのであります。これはですね、信を獲れば見て敬い大きに慶喜せんと。信心を獲るとですね、本当に見て敬いと。見て敬いということも、大変大事な意味があるわけです。

法を聞いて能く忘れず、見て敬い得て大きに慶べば、すなわち我が善き親友なり。

(真宗聖典五〇頁)

『大無量寿経』の中で説かれている、仏法を聞いて法を忘れず。仏陀釈尊が本願真実の教えを聞いて、そして目覚めてですね、大きな喜びを得る。敬うことが出来るというそういう人は私の善き親友であると。釈尊からの友達であると。これも親鸞聖人はその通り受け止められておりました。だから私たちは、仏法を聞いて真実信心に目覚めるということは、釈尊から我が友よと呼ばれるような、大きな恩徳をいただくということですね。

それから『大無量寿経』の下巻、三毒五悪段の前に書かれておる言葉なのですが、

必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に 閉じん。
道に昇ること窮極なし。

(真宗聖典五七頁)

必ず超絶しというところにはですね、具体的には五悪趣の問題ですね。五悪趣というのは、地獄、餓鬼、畜生、人、天。これは寓話的な話じゃなくして、人間がいかにか現実の問題に悩むその悩みは深いかということを表わしております。

地獄は人間と人間とが殺し合うわけですね。今も地球上にあります。家庭生活の中でも上手く行かないという時には殺し合うこともあるし、あんたが出て行くか私が出て行くかという形がある。

餓鬼はこれほど物が豊かでも満足はないと。故に乾いている。

畜生っていうのは人間を畜生扱いするということもありますし、自分が畜生扱いされる。何かの道具にされるということもあります。今の問題は特に厳しいですよ。必要な間は使われるけど、首切られる。

人というのは人間としての問題がいよいよ深刻になってくる。

天というところには色んな快樂とか幸せのものがいっぱい溢れているけれども、それはかえって無くなる時の苦しみが甚だしいということがあるわけです。

そういう迷いの生活を超える。五悪趣は自然に閉ざると。まことの信心を得ればですね。そういう非常にダイナミックな大きな人間の生活の上に開かれた一大事。根本的な大事。根本の大事ですね。そのことを、信を得れば。信を得るということが人間生活の根本の大事でありますということ提起されている。

親鸞聖人が「獲信見敬大慶喜」というところをですね、筆で書き換えられているということはいかに深く憶念しておられたか。そういうことが表れているかと思えます。私たちが親しんでおります『歎異抄』もですね、第一章はご承知のように、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。
(真宗聖典六二六頁)

ただ信心を要とすとしるべしという言葉があります。仏法を聴聞する上において、人間生活において、信心こそが要でありますという意味ですね。信心ということをして失うと、人間の恰好をしておるけど人間とは言えない。地獄や餓鬼や畜生の姿であるということになるわけです。もし信心ということに目覚めなければ、流転の人生に終わってしまいます。これははっきりしている事実であると思えますね。

信心を得るとき、本当に自分自身に会い、人に会う。よき師、よき友、御同朋御同行に会う。そういうことは見敬という言葉の中に言い表されていると思うのです。この信心を獲得するという。獲得ということについて親鸞聖人はですね、

獲の字は、因位のときうるを獲という。得の字は、果位のときにいたりてうることを得というなり。
(真宗聖典五一〇頁)

獲信というのは、信心を得るというのは因の相ですね。見敬得大慶喜。これは果ですね。信心を得るということにおいて大きな喜びを得ると。見敬と。よき人、よきおおせ、そういうものに遇って敬って、大きな喜び、大慶。大慶ということもね、他人事の話じゃないのですよ。私たちの人生において、まことの喜びが見出されなければ、つまらんと。なんで生まれてきたかわからんと言えるようなことなのですね。

親鸞聖人が明らかにしてくださった仏法は、人間のあらゆる問題、根本課題、根本問題。特に今遇うことのできる自分自身の私自身の問題を言い当ててくださっておるという視点をね、私は忘れてはならないと思うのです。どこかの誰かのためじゃない。私自身のことを本当に凝視して仏法が言い表してくださっておる。

信心を得るということが因位。原因となる。種になる。得というのは得る、信心を得ると、見て敬い、得て大きに慶喜する。そういうよき人、よき友、よき仏法に遇うことができ本當の喜びを得ると。

そして大事なのはね、即というのが出てきますけれども。この即というのは即得往生。時日を隔てない。只今直ちにという。そこが凄いところなのですね。時日を隔てず。只今直ちに。因と果が同時なのですね。念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち、でしょ。そのすなわちはこの即ですね。当体全是と言われる。

本願には非常に深い願いが込められておるわけです。人間の命は生まれ難くして生まれ、遇い難くして遇った。いつ終わるか知れない命である。明日のことどころか今日の夜のことにはわからない。そういう人間において、本當に生まれたということの、生きておるということの意味を見出すということは、修行して何年後にわかるというようなことではね、間に合わない。余程優れた人がね、修行して何年後っていうことを目指すそういう歩みもありますけれども。しかし生きておるということは存在自身の命自身の一番深いところからのやむにやまれない要求であると。願いである。

そこに即という。念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち。信心のおこるとき、すなわち。五惡趣を超越するという、そういう生き方が、世界が、人間の世界が本當に開かれてくる。

そこに愚禿釈親鸞と名乗られて、表現するという事は、特に愚禿という、本当に愚かなる存在であるということを経験自身が名乗られてですね。親鸞聖人のこの名乗りを私たちが受けるときに、私は頭が悪いのでわかりませんっていう、そういう理屈は成り立たないのですよ。どういう存在であろうとも、親鸞聖人は、特に悲しきかな、愚禿鸞という言葉の中に、愛欲名利。愛欲に捉われる。愛欲というのは男女間の性愛だけじゃありません。人間が生きるということは歳を取って命終わるまで私は愛欲の尽きないものであると思います。

歳を取ってきてお互いに八十過ぎてですね、仮に喧嘩をすると悲しいです。相手の欠点を論えるようなことでは寂しいです。しかし生きるということはそういう喧嘩もあるということがある。

もう一つ言えばね、私は私の父の言葉として、忘れられないことなのですけども、父は早く連れ合いを失ったわけですが、冬、火鉢にあたりながら父の友達が何人か来ておりましたね。父が言ったのですね。「あんたがたは奥さんがいて喧嘩ができていいなあ」と。「わしは喧嘩をしようにも相手がおらん」と。その言葉がね、鮮明に残っております。

お袋が元気だったときには喧嘩ばかりしとったのですよ。亡くなられてみてね、自分の傍らにいた人がどんなに大事であるかわからんということを経験に沁みてわかった。だからそこには人間の悲しみですね。悲痛と言えまでの悲しみですね。悲しみを通してその人の存在に出会うということが。これが人間。これが殊に凡夫の姿であります。自身は現にこれ罪惡生死の凡夫というこの善導大師の言葉がありますけれども、罪惡生死の凡夫として自己に会う。それを親鸞聖人は

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞。愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。

(真宗聖典二五一頁)

太山ですよ。小さい山じゃないのです。大きな山なのです。それに迷惑して定聚の数に入る。定聚というのはまことの信心が定まるということを用いる。定聚の数に入ることを喜ばず。真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。人間の煩惱っていうのは深いですね。目覚めるということを、必ずしも心底喜んでいるかということ、愛欲名利の面においてね、喜んでおると。そういう愛欲名利の姿というのが、見えてくるとですね、悲しきかなという。

そこで誤解がないように申し上げますと、愛欲名利を非常に悲しみ痛むということは如来の真実の心。一切の人々を救い遂げんという大悲の願。大いなる願いの願に触れてですね、悲しいという。そういう心は私たちの上に呼び起こされる。そういう姿であると思うのですね。

これはですね、親鸞聖人ご自身が、ご自分のお作りになりました「正信偈」についてですね、注釈しておられる『尊号真像銘文』。これは「本願名号正定業」からずっと説明されておるのでありますが。尊号真像銘文では「獲信見敬得大慶」という表現になっております。これは親鸞聖人が八十六歳の時ですね。『教行信証』をほぼ完成させたのは七十代であると言われておりますが、

「獲信見敬得大慶」というのは、この信心をえて、おおきによろこびうやまう人というなり。大慶は、おおきにうべきことをえてのちに、よろこぶというなり。 (真宗聖典五三二頁)

大慶喜というのは、うべきことをえてのちに、よろこぶということが特に注意されております。だから信心を得て、得ることにおいてすなわち喜ぶ心は起こるといふ。そういう大慶ですね。それから

「即横超截五悪趣」というのは、信心をえつればすなわち、横に五悪趣をきるなりとするべしとなり。
(同)

横っていうのは横（よこさま）ということで他力ということを表わすのですが、横に五悪趣をきるなりとするべしとなり。五悪趣というのは地獄、餓鬼、畜生、人、天という人間の迷いの深さですね。

即横超は、即はすなわちという、信をうる人は、ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだまるを即というなり。
(同)

非常に丁寧な注釈であります。即というのはすなわち。信心をうる人は、ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだまる。正定聚のくらいというのは、正しく仏になるということが定まったくらいですね。今、仏というのではない。今は仏とは言えない。しかし仏になるということが定まったくらいであるというこういう言葉で、はっきりしておられます。

横はよこさまという、如来の願力なり。他力をもうすなり。超はこえてという。生死の大海をやすくよこさまにこえて
(同)

やすくというのは易ですね。生死の大海をやすくというのは念仏を申し念仏に表現されている信心に目覚める。信心を得るとき直ちにという、そういう易くですね。よこさまにこえてということは人間の自力の努力ではなくて、如来の阿弥陀のはたらきがそのまま私たちの上に名乗られ、表現されてくると。

無上大涅槃のさとりをひらくなり。信心を浄土宗の正意とするべきなり。
(同)

ここでいう浄土宗というのは浄土の教えに生きる、浄土真実の教えのことですね。即横超ということが言われるところには、人間の苦悩の深い、愛欲広海に沈んで悩んで自分で自分がなんともならないようなそういうような泥沼に足を頼りにしてもですね、人間の自力に頼るならばですね、そういう何ともしようのない苦しみや悲しみに勝たなければならないということがあるわけですが。そういう中に如来の本願に会うときですね、光に会うと。存在全体を照らしてくださる大いなる智慧、大いなる悲しみの光に会う。存在していることが既に悲願の大地に立っておるのである。そういうことをですね、教えられると。

だから愛欲名利の生活がそのまま仏法に会う。仏法を聞く。仏法を生きる、そういう大地へと転ぜられるという意味があると思います。この世界から離れてどこかに行くのではありません。どこか離れて夢の国に行くのではありません。あくまでも現実の大地に立って、生死の大海、煩惱妄念の尽きない、愛欲や広海も尽きないそういう生活。そこに如来の本願が呼びかけられ、信心を得ることが願われているのであると。

獲信ということについて憶い起こす言葉があります。寺川俊昭先生が曾我先生に質問なさったのですね。「信心を私たちがいただくということは、如来より賜った信心をいただくということですよ。よろしゅうございませうか」ということをおっしゃられて。曾我先生が言われたのは、「信心を賜る、いただくというふうな表現では弱い。信心を獲得するとおっしゃいませ」と。これは強烈じゃないですか。

だから私は念仏に生きる、信心に生きる人に会い、そのおおせを聞くということは本当に大きな意味があると思います。獲得するとおっしゃいました。そこには悪戦苦闘の戦いがあるわけですね。素直に聞いて喜んでおれば信心をいただくというそういうこともないわけではないかもしれませんが、どうですか。そうはどっこいと。それはやはり曾我先生がおっしゃった言葉で、

「助ける助けないは如来の責任」

助ける助けないというのはあくまでも法ですね、真実の法。仏法。

「助かるか助からないかは衆生の責任」

はっきり言えば私自身の責任なのです。助かるか助からないかは。本当にね、急所。ポイントをね、要を抑えておられます。それはこういうことを言われた曾我先生ご自身が長い深い苦悩の生活を、思惟の生活をくぐっておられたのであると思いますね。やっぱり助かるか助からないかは衆生の責任。私の責任。そこに本当の意味の主体性ということが一人一人の尊厳尊重ということが言われておるのではないのでしょうか。

だから親鸞聖人は、つねのおおせの中で、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」ということは、あらゆる人間の苦悩というものを、親鸞一人の上に引き受けられてね、本願に出遇ったと、そういう意味でしょう。だから親鸞のひとえに親鸞一人がためなりけりという言葉に遇うとですね、遇った人は本当にそうだとって同感し、同じく感応するのです。親鸞が親鸞自身においてひとえに親鸞一人がためなりけりと。私のためであったという。そういうことが呼び起こされるわけですね。

そこには曾我先生のお言葉をいただければ、「助ける助けないは如来の責任」。仏法のはたらきであって、「助かるか助からないかは衆生の責任」であると。綺麗の水の流れておる川があつて馬がいて。馬は水が流れていても飲まなければ喉の渴きは癒えません。どんなに川はどうとうとして流れていても、水が流れている傍まで行って水を飲みます。人は手綱を引いて水のところまで口をあてさせることは出来ませんが、飲むか飲まないかは自身です。

やはり助かるか助からないかという問題は私自身の存在に、人間存在のですね。内奥、一番深いところにですね、人間の衆生の意識を超えてですね。清沢先生はよく申し上げる言葉で言えば、

「人心の至奥より出づる至盛の要求」

宗教を求めると。宗教の要求は人心の人間の心の至奥、もっとも深いところから起こる。至盛、最も盛ん。衆生っていうところには止むに止まれぬということがありますね。善いからする、悪いからやめる。そんなもんじゃないです。止むに止まれぬ。念仏の教えに遇って信心に目覚めるということは、あらゆる人間存在の止むに止まれぬ本当に深い要求。願いに応えると。願いに響く。

だから「獲信見敬大慶喜」という言葉は大変な言葉です。目を見張るようなね。信心を得ると。獲得する。だから私たち、曾我先生のお言葉をいただければ、この人生に必ず果たし遂げなければならないことがある。それは自らが助かることであると。自らが目覚めることである。そういうことですね。自らが助かり目覚める。人として本当に誕生するということが実現しなければ、祖先の方々のご苦勞、お礼ということをやっても応えにはならないと。形ばかりに、名前ばかりになるということではないかと思ひますね。

親鸞聖人ご自身が制作なさいました「正信偈」について親鸞聖人ご自身が、注釈を述べておられるということが、いかに親鸞聖人ご自身が感動しですね、感応してですね、讃嘆しておられる。そこには如来の回向に遇い、回向に生きられる。そういう自分の考えで書いた、そんなものではないですね。如来自身の表現ですね。私の上に与えてくださる。これは『教行信証』の信心の表す巻では、

それ以みれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す (真宗聖典二一〇頁)

私たちの上に信心を獲得するということが起こるのは、事実となるのは如来の選択の願心。選び取って、自力の行を捨て、本願力のはたらきをいただくという。取捨選択がはっきりしていますね。その選択の願心より発起する。開き表れ起こって来るのですね。私たちの上に湧き上がってくる。起こってくる。これはね、発起するというようなことが人間の行動の生活の私は原点。原理。言葉としては一念発起なんてことをよく言いますけれども、潰れてしまうの是一念発起じゃなかったということなのではないですか。やっぱり一念発起するということが湧き上がってくる大地がね、本願の大地である。本願の心であると。願心であると。そこでは生死を尽くしてということが言われておると思います。だから一念発起というようなことは如来の選択の願心が私たちの上に起こってくる。沸き立ってくると。

『歎異抄』の先程の、親鸞聖人のつねのおおせをいただければ、

ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。 (真宗聖典六四〇頁)

そくばくの業というのはそれ程の業。人間のありとあらゆる苦悩、悲しみ、罪業。そういったものを抱えておる存在をたすけようと思立ってくださった本願のかたじけなさよと。思立ってくださったということはね、この身に願いがかけられておるということがありますね。この身に願いがかけられておるということはよく使われる言葉でありますけれども、そのことについてね、私は人間関係の間においてもね、疎いのではないかと思われまますね。

親が子に願いをかける、子が親に願いをかけるということは無意識の内に行われているのでありますが、気付くということは容易ではありません。如来の本願のお心に目覚めるとき、私は身近には、そういう身近な人の願いがかけられておる存在なのだということに気付いていくと思うのです。根本は如来の大悲の願がこの身にかけられておる存在であると。信心を得るということは、信心を獲得するということは、そういう大いなる如来の真実のはたらきに目覚めて、本当のよき師、よき友に恵まれて、本当に人生において敬うべきものに遇いですね、尊むべきものに遇いですね、尊むべきものをいただいて生きると。そういうことにおいて直ちに五悪趣を超えて生きると。地獄餓鬼畜生のようなそういう人間の迷いの生を超えて生きると。

即というのはその時直ちにとという言葉ですが。例えて言えば、こんなに子どものことに苦勞させられてたまらんと。悩むのはご免だというふうなことも親として時に出てくるかもしれません。しかしよくよく案じてみれば、この子の誕生をどれ程願い、どれ程喜んできたかわからない。そういう親自身がこの子どものいささかの問題によってですね、こんな子を産もうとした覚えはないというようなことはね、以ての外、身の程知らずであると言わなきゃならんと思います。この子が生まれてきたおかげで人となり親となることができた。この子の抱えておる問題を私もまた悩むことができる。悩まざるを得ないということに気が付く時ですね、その親の悩みは自ずと子に響くと

ということがあるかと思えます。

大変身近なことで恐縮なのですが、私自身の出遇ってきたことの中から言うと、まあいわゆる青春時代に人生の問題に悩んでいる時に、温かい布団の中で寝るということはこう憚れるような気持ちになって、納屋の中の藁の中でですね、しばらく寝た時があるのです。真冬もですね。その時に年老いた父が入ってきてね、私の寝ている横で寝たのですよ。大きなため息と一緒にね。言葉も何もない。私はその時ね、なんかね、じーんとしたのを感じましたね。自分の心は親にわかるはずもないものだと思っていたらそうじゃないと。親は悩んでいたのものであると。子どもは納屋の中で寝ているということがあって、親父はたまらずというか、なんとも方法がなくて、横に来て寝たということなのだ。まあ私は受け取っているのですが。

まあなんのためにこのことを申し上げたかと言うと、自分だけが悩んでいるのではないと。身近な人間関係の中で言えば、悩んでくださっている方がおられると。そこによし人として見出せなくても、如来の大悲は色もない形もない。あらゆる相対性を超えた如来の大いなる絶対なる大悲は、いつでも私自身の中にはたらいておると。一番深い闇の底から闇の底を突き破るようにしてはたらいてくださった。そういうことをですね、教えられるのでありますから、信心を得るということが、事実としては信心を得ると、信心に目覚めるということが本当に肝要なことであるということを知らされるのであります。

時間が参りましたので言い尽くせませんが話のほうはこれで終わらせていただきます。どうもご静聴くださいましてありがとうございます。